

中国共産党研究四十年

高橋伸夫

- 1 革命政権と国際社会の関係に関する問題
- 2 「散漫な」党組織の勝利という逆説
- 3 「服務中心資料」との出会い——人民共和国史の世界へ
- 4 『構想なき革命』について

こんなにも多くの方々にお集まりいただき、たいへん光栄に思います。本日は、私の恩師である山田辰雄先生にご出席いただいただけでなく、わざわざ中国から何人もの先生方にお越しいただきました。深く感謝申し上げます。

実をいえば、私はそもそもこれほど多くの方々を集めて、盛大に最終講義を行うことなどまったく考えておりませんでした。しかし、ゼミのOBたちとの話の成り行き上、かくも華々しい会合になってしまったのです。こうなった以上、こんなこともあった、あんなこともあったというたんなる雑談で、お茶を濁すわけにはいかなくなりませんでした。いくらかでも意味のある話をしなければなりません——できるかどうか、はなはだ心許ないのです。

が。今日の話の趣旨は、中国共産党に関するこれまでの自分の研究——それは主として歴史的な研究ですが——について、主として問題設定の仕方、方法論、そして資料の組み合わせという角度から振り返ってみるということです。いわば研究の種明かしです。これら三つの調和のとれた組み合わせが、研究の構想段階であらかじめ用意されているなどということは、まずありません。問題設定と方法論が先行する場合もあれば、資料のほうを先行する場合もあるでしょう。私の場合、まだ若くて駆け出しの頃は、問題設定が最初に来て、それに合う資料を探していたのですが、経験を重ねるにつれて、資料のほうに問題設定を触発される場合のほうが多くなりました。もっとも、これは頭のなかのどこかに、まだうまく言語化されていない問題が先にある、何となくそれに適合的な資料を求めていたから、それが見つかったということなのかもしれません。いずれにせよ、これは鶏が先か卵が先かという話に似ています。このような話が、皆さんにとってどれほどの価値をもつかはわかりませんが、皆さんの読書の一助となればと願うだけです。

本題に入る前に、なぜ私が中国研究の世界に足を踏み入れることになったかについて、ひとことだけ述べておこうと思います。それはひとえに、私の父方の家族の影響を受けたからです。私の祖父は、日中戦争当時、満州日日新聞社に勤めておりました。最後は、発行責任者という肩書だったと聞いています。父親は大連生まれの大連育ちです。そうした関係で、子供の頃からよく中国の話聞かされ、気がついてみたら、中国共産党の研究をやるようになっていたというわけです。ひとつだけ、わが家族に伝えられている祖父の武勇伝を紹介しますと、一九三〇年代末、ある日の夜、彼が例によって大連のバーで酔っ払って、突然あたりかまわず「インターナショナル」を歌い始めた。すると、運悪く、そのバーにいた客のなかに満鉄総裁の松岡洋右の甥がいたのです。当然のように、この甥は、「貴様、この時局に何たる歌を歌うか!」とつかつかってきたため、取っ組み合いの喧嘩が始まります。幸い、わが祖父は大柄で力も強かった。そして最後には、この甥を柔道の技で締め落としたとの

こと⁽¹⁾です。もちろん、祖父は駆け付けた警察官に連行されて何日も留置場に入ることになりました。祖父は、終戦後すぐに大連で何者かによって誘拐されます。結局、身代金を払って解放されたのですが、祖父が誘拐されたことを知った祖母はといえば、旦那の毎晩の夜遊びにひどく憤慨していたようで、旦那のことを心配するどころか、「ざまあみろ」といったそうです。

私の父親は、戦後日本に引き揚げてくる前に、ソ連軍接收下の南満州鉄道で電気技師として働きました。ロシア人と一緒に働いていたのです。ウクライナからやって来た農民出身の兵士たち、自分がどれだけウオッカを飲めるかを競い合っていた少年兵たちとともに働いていたらしい。父は、ロシア人からもらったパンで、どうにか家族は飢えずに済んだといっています。こんな話を子供の頃から聞かされていたら、中国と歴史に興味がわかないなどということがありうるでしょうか？

1 革命政権と国際社会の関係に関する問題

さて本題に入ります。私は、筑波大学で修士論文を書いた際、中国共産党の延安時期の外交政策をテーマとしました。延安時期は、共産党はまだ国家を樹立していませんでしたから、厳密には「外交政策」とはいえませんが、しかし、ともかくも、党指導部のソ連とアメリカに対する政策を取り上げたのです。これは、正直に言えば、よく考えて選んだテーマではありませんでした。若い大学院生にありがちなことですが、修士論文のテーマにならずなものを選んだだけのことです。そして、この延長で中華人民共和国建国前後の時期における中ソ関係についての博士論文を書くことになりました。当時、筑波大学には徳田教之先生がおられ——『毛沢東主義の政治力学』という著作で知られる慶應義塾大学出身の先生です——中国研究の分野で博士課程に進むなら、慶應がよい

だろうというので、博士課程では幸運にも、山田辰雄先生の指導を受けることができたのです。

博士課程で勉強をしているうちに、ようやく自分のやっていることの意味が理解できるようになってきました。それは一言でいえば、革命政権が誕生して、国際社会にデビューしたときに、その政権が自分自身に課した使命や革命政権としてのアイデンティティと、国際環境がその新しい政権に課した構造上の制約とがどのように調整されたかという問題でした。現状打破を掲げて誕生した革命政権は、国際社会に登場したとき、どこまで革命的でいられるのでしょうか？ このような問題設定それ自体はとくに新しいものではなかったのですが、それまでの中国政治の研究においては、必ずしもバランスのとれた形で検討されてきませんでした。というのも、中国共産党と国際環境の関係を考えたとき、共産党の外的条件に対する適応という側面よりは、むしろ国内政策の対外政策の領域への投射という側面がかなりバランスを逸した形で強調されてきたからです。そこで、私は革命の国際秩序への適応という側面をクロースアップする形で描く——でも、革命政権としてのアイデンティティも重視しながら描くことによって——バランスの取れた歴史の理解が可能になると考えたわけです。

その場合、どんな方法を取ったかというのですが、こういう方法を取りました。つまり、中国共産党の国際情勢認識を形作る概念と命題は、基本的にソ連から与えられたものだったのですが、ソ連から受容するように迫られた認識枠組に対して、中国共産党が示す特徴的な反応に注目したのです。ソ連から与えられた認識枠組に対して、中国の共産主義者たちは、一見するときわめて従順に従うのだけでも、よく調べてみると、その認識枠組には巧妙に独自の修正が加えられていて、ある場合には、その実質を失ってさえいる。なぜそうなるかといえば、ソ連によって与えられた共産主義者としての国際的任務から、中国における革命戦略の自立性を防衛する必要があったためです。そこで、ソ連から与えられた国際情勢認識の枠組のなかに巧みに織り込まれた独自の要素を抽出することによって、中国共産党が革命における国際的契機と国内的契機をいかに調整しようとしたかを浮

き彫りにできると考えたのです。

研究のハイライトになったのは、第二次世界大戦後の国共内戦期、つまり中国革命の最終局面において——これはまさに東西冷戦が姿を現す時期と重なっていたのですが——中国共産党が冷戦に対してどのような態度を取ったかということでした。中国共産党が、次第に姿を現す冷戦構造のなかで、すんなりとソ連を先頭とする社会主義陣営の側に収まり、アメリカを先頭とする資本主義陣営と対抗するなどということがありえなかったことは、少し考えればすぐにわかります。というのも、共産党は国内で盛り上がるナショナリズムを味方につけて、内戦に勝利しようとしていたからです。つまり、反帝国主義、反植民地主義を掲げて民族の自律性を回復するというのが彼らの旗印だった。だから、蒋介石の国民党に対して、おまえたちはアメリカに従属する勢力である、売国的勢力であるという批判を投げつけていたのです。ならば社会主義陣営の側について、ソ連に従属することが簡単に許されるはずはありませんでした。しかし、そうはいっても、冷戦構造の圧力は簡単に払いのけられるようなものではなかった。そこで、中国の共産主義者は深く苦悩します。この苦悩を描いたのが、私の博士論文の最も重要な部分だったのです。結局、一九四九年六月末、毛沢東が有名な「一辺倒」宣言を出して、新中国は社会主義陣営の側に立つとはっきり述べるのですが、実はこのときでさえ、中国共産党は社会主義陣営に対する完全な服従を取り繕いながら、なおもアメリカをはじめとする資本主義国との関係を残しておく道を模索していたというのが、私の重要な論点のひとつだったのです。こうした問題が、今日の国際政治学でいう、コンストラクティブイビズムという立場につながっていることに気がついたのは、博士論文を出したずっと後のことでした。

この研究は、一九九六年に私のはじめての著書となって刊行されましたが、今日からみて、問題設定は悪くないけれども、当時の資料的限界を反映しています。現在なら利用可能なストーリーと毛沢東の間でやりとりされた電文などをまったく利用できなかった。そのために、残念ながら今日ではもはや読む価値はありません。マイ

クロフィルムになった資料をほんとうに真剣に読んだのですがね。中国共産党の機関誌のひとつである『群衆』など、資料の重要なものは、ハーバードのイエンチン図書館で集めました。しかし、そこに置いてあったコピー機がひどくて苦劳しました。字がかすれてよく読めないのです。しかも、自分でコピーした紙の束を図書館のカウンターにもって行って、一枚七セントで計算してお金を払うのですが、係の人間が計算ができないわけです。例えば、一六枚持っていくと、七かける一六枚だから、一一二セント、一ドル一二セントになるのだが、相手は絶対一ドル二セントだといって譲らない。そこで、私はニヤリとして、ああ私が計算を間違った、一ドル二セントだといって少し得をする。そんなことがよくありました。

2 「散漫な」党組織の勝利という逆説

ところで、この本を出す前の一九八九年に私は京都外国語大学に就職しておりました。天安門事件が起こった年です。そして京都に七年間おりました。当時の京都はいまと違って、観光客であふれかえっているわけではなく、とても住みやすかった。とはいえ、就職したとはいっても、ちょっとした手違いが起こって——それについては詳しく申し上げますが——はじめから専任講師になれたわけではなく、大学の図書館の嘱託職員として二年近く勤めたのです。毎朝九時に出勤して、タイムカードに出勤時間を記録し、夕方五時まで仕事をした。大学図書館は夜九時まで開いていますから、週に一度は遅い時間まで働きました。天安門事件が起きた当日、私はいつものように図書館の地下にこもって、図書カードの作成をやっていました。「ああ、自分はこんな時に何をやっているのだろう」と思ったことを覚えています。

しかし、悪いことばかりではありませんでした。図書館員をやっている時に、いろいろな書店の人と親しくな

りました。そしてある日、京都の朋友書店という中国書籍専門店の人が、「たまたまこんなものが手に入ったけれども、興味ありますか」といって大量に持ってきたのが、『革命歴史文件彙集』だったのです。

この資料集は、一九二〇年代から三〇年代にかけて、中国共産党が各地の農村部で築きはじめた革命根拠地に関する内部資料を集めたものです。⁽²⁾当初、私はまったくその価値がわからず、何となく福建省の根拠地に関する資料から読み始めたのですが、その内容に非常に大きな衝撃を受けます。そして、もはや外交政策の研究などどうでもよいとさえ思うに至ります。そして、ここから私の研究の第二ラウンドが始まりました。

この資料集から何が浮かび上がるのか？ 一般的には、毛沢東が作り上げた中国共産党の組織、そして共産党の軍隊（紅軍）は、蒋介石が作り上げた国民党の組織および軍隊とは大きく違っていたと考えられてきました。

少なくとも中国共産党自身はそう主張してきましたし、日本とアメリカの研究者たちも長い間そう考えてきました。共産党は国民党と違って、厳格な規律を備えており、よく統率が取れていて、黨員たちおよび兵士たちは党が掲げた大義に忠実だった。だから、共産党は国民党を打ち負かし、中国大陸の支配者になることができたのだ、と。ところが、『革命歴史文件彙集』は、そうしたイメージを根底から揺さぶる衝撃力をもっていたのです。

この資料が示すところ、黨員たちは実に簡単に入党しては、次々にやめていきました。多くの報告書は、党組織はまるで宿屋のようだと述べている。つまり、たくさんの黨員が今日「宿泊」したと思ったら、明日の朝にはいなくなってしまうというのです。したがって、メンバーの流動性が非常に大きい組織です。黨員集会の様子についてもたくさんの記録があります。それによれば、黨員と非黨員と元黨員が一緒になって「黨員集会」をやっている。だから、党組織の外延が、つまり内と外を分ける境界がはつきりしていません。

もっと衝撃的な事実は、各地の党組織が行っていた資金集めの方法です。戦争には何といってもお金が必要ですが、革命にも必要です。一九二一年に成立してから何年かは、中国共産党の収入の大部分は、コミンテルンか

ら与えられた資金でまかなわれていた。しかし、一九二七年夏に国共合作が崩壊して、共産党が農村に放り出されてしまうと、モスクワから資金が届かなくなってしまう。さて共産党はどうしたか？ どの革命根拠地でも事情はまったく同じなのですが、党組織は地主あるいはその家族を誘拐し、身代金を得ることによって革命の台所を賄っていました。つまり、営利誘拐が共産党の革命を財政的に支えていたのです。一九三二年、河南省のある県の党委員会の報告書が述べるところ、一度地主の誘拐が成功すると、数ヵ月分の活動費用を賄うことができる、と。だから、やめるにやめられなかったのです。⁽³⁾ 広東省の党組織は、生きている地主だけでなく、死んだ地主の墓を掘り返して、その死体まで誘拐していました。資料には、共産党が営利殺人に手を染めているとの報告さえ見られます。農村で、対立する二人の地主の一方から金をもらって、他方を始末していたのです。

以上は党組織に関することですが、紅軍に関する資料もたくさんあります。実に多くの文書が、兵士の逃亡について語っています。部隊の兵力の四分の一、ときには三分の一までもが、逃亡によって失われていると記されている。だから、中国のドラマに登場する紅軍兵士の勇敢な姿とは大きく違っています。なぜそれほど多くの兵士たちが逃亡したのか。それは、もともと農民である彼らが、自分の村から離れたくなかったからです。皆さんもご存じのように、中国共産党の伝家の宝刀は土地改革です。地主から土地を奪って貧しい農民に分け与える。たしかに共産党は革命根拠地で土地改革を試みました。ところが、多くの農民たちは、土地を受け取ったらそれで「革命」なるものは終わったと考えた。彼らは、わざわざ自分たちが暮らす村から遠く離れた場所に行って戦争などやりたくなかったのです。

もうひとつ、兵士たちが村に逃げ帰ったのは、村に残しておいた自分の奥さんが心配で仕方がなかったからです。うっかりしていると、大事な女房をほかの男に取られてしまう心配があった。なぜそんなことが起こるのか。中国共産党が掲げた重要なスローガンのひとつは、結婚と離婚の自由でした。これは長い中国の歴史において、

実に画期的なことです。まさに革命の名に値するものだったといつてよい。共産党が村にやってきて、さあ皆さん、これから結婚も離婚も自由ですと宣言すると、一斉に女性たちが自分の夫に三下り半を突きつけます。それは、彼女たちの結婚が、すべて親の決めたものだったから当然です。離婚を突きつけられた夫たちは、女房に暴力をふるって離婚を阻止しようとする。女性たちはそれでも離婚して、別の男と新しく結婚しようします。若い男たちの多くは、当然、こうした動きを歓迎します。貧しい農民にとって、結婚など夢のまた夢だったからです。この資料集には、前線で作っている兵士の女房を、共産党員たちが奪っているという記述が少なからず登場します。その結果、革命根拠地の農村では、離婚、結婚、再婚、再再婚が繰り返されて、連日、上を下への大騒ぎとなります。当然のように、梅毒も蔓延しました。このような情景をみると、当時の中国農村の若者にとって、革命というのは、第一義的に、女性を獲得することだったのではないかと思えてきます。実際、地方党组织の報告書の多くは、自分たちは国民党との闘いよりも、結婚問題の処理のほうに多くのエネルギーを割いている、と述べています。

この資料集について、まだお話ししたいことはたくさんありますが、時間の関係でこれくらいにしておきます。結局、『革命歴史文件彙集』が何を語っているかといえば、中国共産党の組織、そして軍隊は国民党のそれと本質的に違いは見当たらないということです。どちらの組織もルーズで、あまり統制がとれておらず、腐敗している。われわれはこれまで長い間、共産党と国民党の違いについて語ってきたのだけでも、この資料集の内容を踏まえると、むしろ類似性のほうが際立っているのです。それどころか、共産党組織を軍閥の組織と同じ平面において比較考察するという可能性にさえ道を開いています。

こうして私は、一九九〇年代終わりから二〇〇〇年代初めにかけて、日中戦争期を迎える前の中国共産党の党组织の性格について、いくつかの論文を発表しましたが、当時の学会での受けとめ方はまったく冷ややかなもの

でした。そもそも共産党と名の付く組織が、そんな性質をもつはずがないという批判をさんざん受けました。賛成してくれる人がほとんどいなかったたので、私も次第に自信を失いかけたのですが、よく考えた末に、やはり自分は大きく間違っていないと思えるようになりました。そもそもロベルト・ミヘルスやフランク・ブルケナウがいうように、ヨーロッパ諸国の社会民主主義政党や労働者政党でさえ厳格な組織を実現することができず、また中国国民党もそれに失敗していたというのに、どうしてこれらの組織より経験に乏しく、またもつと扱いにくい素材（すなわち農民 から作り上げられ、しかもより困難な客観的諸条件（広大な地理的空間と貧弱なコミュニケーション手段）のもとに置かれた中国共産党に、より「共産党らしい」組織が可能であったなどといえるでしょうか？ なるほど、中国共産党の頂点部分は、コミンテルンとしっかりつながっていた。しかし、党組織のピラミッドを下に行けば行くほど、ヨーロッパ近代とのつながりは問題にならなくなります。そして、中国の長い伝統とのつながりのほうが、はるかに大きな重要性をもってきます。そのために、一般党員たちは、「党」なるものをイメージする際に、おそらく伝統的な秘密結社や匪賊組織しか参照枠をもっていなかったに違いのないのです。いまや私は、かなりの自信をもって次のように主張することができます。すなわち、一九二〇年代から三〇年代にかけて、中国共産党の組織は、およそレーニン主義的な「固い」組織ではなかった。党指導部の意図に反して、末端部分ではひどく「ルーズな」組織ができあがっていた。党組織は、外部に対して比較的高い開放性を備えていた。加えて、党内における情報伝達が垂直的にも水平的にも分断されがちであったために、党組織が全体として低い凝集力しかもつことができなかった。さらに、党員たちが自ら去り、病気で死に、肅清されることで常に入れ替わったために、組織の流動性が高く、彼らと非党員との間の価値・世界観および行動様式の境界は曖昧だった。要するに、まったく共産党らしくない組織だったのです。

『革命歴史文件彙集』は、従来の党組織のイメージを大きく変えただけではありません。中国革命そのものの

イメージをも大きく揺さぶったのです。これまでの中国共産党の公式の歴史において、共産党と農民はきわめて幸福な結婚をしたと示唆されてきました。共産党は農村で土地改革をはじめとするさまざまな社会改革を試み、農民たちがそれを大いに歓迎したこと、両者の間に強い結びつきが生まれた。その結果、農民は共産党に対して、熱烈で、持続的で、全面的な支持を与え、両者は手に手を取って伝統中国を全面的に改造していったのだ。これが中国におけるオフィシャル・ヒストリーの基本的な語り方です。そして、日本でもアメリカでも、研究者たちはこのような語り方を受け入れて、共産党と農民の強い結びつきを生んだ究極の要因は何だったか——ナショナリズムか、それとも小作料や借金の減免か、などと議論してきました。しかし、『革命歴史文件彙集』は、中国共産党が出している資料集でありながら、そうした見方を実質的に自ら否定しています。そもそも、この資料集は、共産党が農村で黨員とした人々のなかに、農民とはいえないような人々が少なからず含まれていたことを自ら暴露している。地主、商店主、そして匪賊集団や秘密結社のメンバー、さらには無宿者、ごろつきといった人々です。中国語でいえば「社会閑雑」（役立たず）と呼ばれるような人々です。要するに、主として労働者階級をメンバーとして集めなくてはならないはずの共産党が、いわば階級的雑居状態となっていた。そして、先ほども言ったように、黨員たちは入党した後、すぐにやめていったのです。

それは、党の周辺にいて党を支持したと思われる人たちも同様です。支持は長続きしないのです。例えば、いくつかの資料に描かれていることですが、多くの農民が紅軍の食料集め——これは国民党支配地区での略奪だったとみられますが——を助けるために、兵士についていく。しかし、農民たちは目的地に着くと自分たちで勝手に略奪を始め、食糧の確保に成功すると、紅軍のことなどお構いなしにどこかに去っていく。彼らは紅軍を自分たちの目的のために勝手に利用していたのです。したがって、われわれは、人々が共産党に対して与えたと思われる「支持」についてあらためて考える必要があります。いまや、私は次のように主張することができます。中国

の農民は共産党に対して熱烈で、持続的で、全面的な支持を与えたのではない。むしろ、農民は共産党に対して冷めた、その場限りの、条件的な支持を与えたと考えたほうがよい、と。

これが見方は、歴史解釈上の厄介な問題にわれわれを導くからです。どういう問題かといえば、もし毛沢東の党と蒋介石の党の間には違いよりも共通点のほうが際立っていた、そして共産党は農民と特別な関係を築くことができなかつたとすると、共産党はどうして最終的に革命で勝利を収めることができたのか、ということです。こうして、中国革命のプロセスと結果に関する研究を、これまでよりも一段高い地点で振り出しに戻してしまつた——これが、私が二〇〇六年に出した『党と農民』という本の意義でした。

それにしても、なぜかくも杜撰にみえる組織が、農民たちの限定された支持を頼りに、最終的には国民党を押しつけて中国大陸の支配者となつたのでしょうか？ 共産党の勝利に歴史的な必然性などなかつた、それは主として偶然に助けられた勝利だったかもしれない、と私も考えないわけではありません。サッカーの日本代表だってスペイン代表に勝つことはあります。一〇回試合をやつて、九回は勝てないでしょうが、一回は勝てるかもしれない。この「たまたまの一回」こそが共産党の勝利だったのではないか。兵力と装備の面では圧倒的な優位に立っていた国民党側のおごとと、内部の腐敗が勝敗を左右した、つまり国民党側のオウンゴールで共産党は幸運にも勝利を収めたのではあるまいか、と。

でも、日本代表が三年前にスペイン代表に勝てたのには、やはり理由があります。選手たちの育成方法、彼らのたたかう精神、体力、技術、戦術、試合に合わせたコンディショニングなどなど。彼らは決して幸運だけに頼って勝利を収めたわけではないでしょう。同様に、中国共産党にも勝利を可能にした何らかの条件が備わつていたはず。果たして、それは何であつたか？ 残念なことに、『革命歴史文件彙集』は、どの根拠地について

も共産党が長征を開始した一九三三年、あるいは三四年までの資料を収録しているにすぎません。だから、日中戦争の時期において共産党がどのような組織的發展を遂げたのか、そして共産党と民衆の關係にどのような変化が現れたのかは、まだよくわからないのです。この資料に匹敵するような高密度の資料を、われわれはまだ手にしていません。したがって、今のところは、日中戦争時期にいかなる変化が現れたのかを予想できるだけです。つまり、過去を予想することです。

幸いなことに、またあとで申し上げますが、『中共重要歴史文献資料彙編』という資料群のなかに、いくつか一九四〇年代の党組織の様子を物語る資料があり、それをいま大学院生の諸君が読んでくれています。彼らの報告を聞く限り、共産党の組織的姿は一九三〇年代と大きく違っているようには見えませんが、「散漫な」党組織は、多少厳格さを増しているようにみえるけれども、やはり「散漫な」性格をとどめている。加えて、根拠地の人々は共産党が思うようには動かない。だから、延安で行われた大生産運動も、生産運動としては成功しておらず、共産党の財政はアヘンの輸出に依存している。しかし、重要な変化がないわけではない。特徴的なこととはいえば、先ほど言った「社会閑雑」と呼びうる人々、それから共産党と国民党との間でどっちつかずの態度をとる人々の扱いに習熟しているようにみえることです。つまり共産党が、ルンペン・プロレタリアートであれ革命勢力に対して曖昧な態度をとる人々であれ、彼らと互いに依存する關係となつて、彼らを一時的にでも革命のために利用する術を身につけているようにみえるということです。

これはおそらく共産党が、われわれが理解している意味での近代的な政党になりきれず、伝統的な社会集団という組織的性格をもつていたために可能となったことです。でも、その一方で、たしかにコミンテルン流の規律もまた持ち込まれている。それは延安整風運動のときに顕著に現れるのですが、黨員に対して容赦なくテロルを用いる。つまり、一九四〇年代の共産党は、一方において依然として古く伝統的な中国の社会集団の特徴を備え

ているけれども、他方において新しいのです。このような組み合わせは、蒋介石の国民党ではありえなかったかもしれません。国民党は伝統的な社会集団であるよりは新しかったし、他方、レーニン主義的な政党としてはまったく不十分だったからです。とはいえ、先ほどの問題は、中国現代史の最大の問題としてまだ残っています。

3 「服務中心資料」との出会い——人民共和國史の世界へ

さて、二〇〇六年に『党と農民』という本を出して、革命史の問題にひと段落つけた後、私は数年間、中国における市民社会の可能性という理論的な問題領域にひたりました。中国が胡錦濤政権の時期を迎えており、民主化の展望という問題について熱心な議論が行われていた時期だったからです。でも、二、三本論文を書いた後でも、またしても研究上の大きな転機が訪れます。それはアメリカで、とんでもない資料集に出会ったからです。資料の正確な名称は『中共重要歴史文献資料彙編』。ロサンゼルスにある中文出版物服務中心というところから発行されています。この「企業」は所在地がわからず、連絡先はGメールのアドレスのみ。したがって、企業情報も一切不明です。この得体の知れない企業が、一九九六年から中国共産党および政府の内部資料を、どうやって手に入れたかはともかく、大量に集めて印刷し始めたのです。そのために、私はこの資料集を勝手に「服務中心資料」と呼んでいます。この資料群は現在、ハードカバーの付いた本の形で、八〇〇〇冊以上ある。そして、いままなお増殖中です。

私はこの資料群の存在に、二〇一二年冬になるまで気が付きませんでした。中国共産党の研究をやっているというのに、こんなに大事な資料の存在に気がつかなかったなんて、実に間の抜けた話です。その存在を初めて知ったのは、パークレーにできたばかりの東アジア図書館でした。ちょうど家内がパークレーのロースクールに

留学していたので、クリスマスに彼女に会いにバークレーに行ったのです。図書館の書架の間を歩いているうちに、なにやら簡易製本されただけのコピーの山が大量に並んでいるのを見つけた。なんだろうと手に取って眺めたら、なんと新疆イリ地区の党委員会の資料だった。これは普通の資料ではないと直感しました。そこで私は家内と一緒に、写真に撮れるだけの資料を写真に撮り、そしてこの資料について調べ始めました。すると、アメリカのいくつかの大学——バークレー、スタンフォード、UCLA、ハーバード、ノースウエスタン、プリンストン、そしてオーストラリア国立図書館がこの資料をもっていることが分かります。そして、最大のコレクションはUCLAの東アジア図書館にあることが明らかになりました。

そこで、私は家内にバークレーからUCLAまで行ってもらって、そのコレクションがどのように利用できるのか見てきてもらいました。すると、その図書館は入館証がなくても、だれでも利用できること、開架式の書架に並べられていて、好きに手に取って閲覧できることがわかったのです。こうして、二〇一三年から、慶應グループの一年一回のUCLA詣でが始まりました。毎回、五、六人の撮影部隊を組んで四泊五日程度の日程で撮影してくる。その結果、現在、慶應の中国研究センターのコンピューターにはおよそ一五〇〇点を超える文書が蓄えられています。これが私の東アジア研究所長としての最も重要な貢献でした。

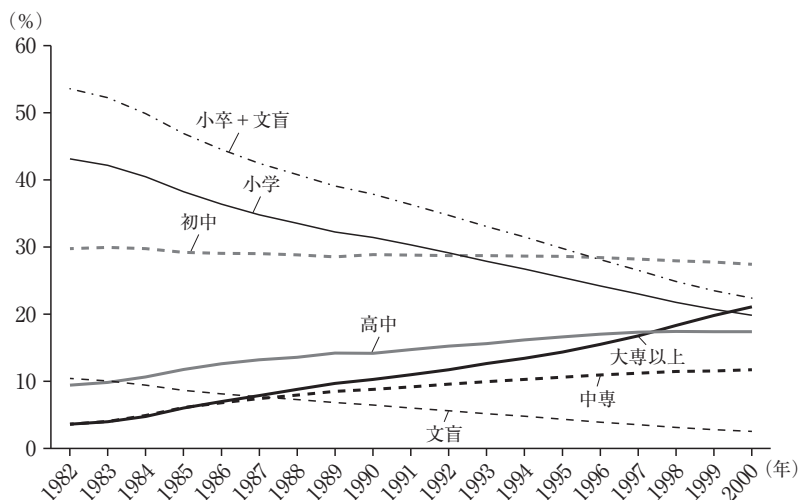
ともあれ、この資料集は、実にさまざまな方面の資料を含んでいるために、多くの研究を可能にしてくれます。そのひとつは、中国共産党組織の社会学的研究です。かつてロベルト・ミヘルスがドイツ社会民主党について行ったような、党組織がどのように社会に根差しているか、およびそうした根差し方の変化を明らかにするような研究です。これは、ゼミの学生諸君にも参加してもらいました。資料集に収められていたデータを使って、さまざまな図表を作成してもらったのです。これはいわば中国共産党の「からだ」と「こころ」の変化について語る試みです。「からだ」というのは、党組織がいかなる社会的成分から成り立っているかということであり、「こころ

ろ」とはそのような「からだ」をもっているがゆえに、備えざるをえない心性を指しています。つまり、存在が意識を形作っているという唯物論的な想定に基づく研究です。図1は試みに作ってみた学歴別の党員数の変化に関する図表です。⁽⁵⁾

そして図2は、党員全体が高齢化し、退職者の割合が大きくなっていることを物語るものです。こうして一九四九年から二〇〇〇年までの中国共産党の「からだ」に現れた変化を観察した後、得られた暫定的な結論はこうです。一九四九年から二〇〇〇年にかけて、党員の社会的背景は明らかに多様化した。建国当初、中国共産党は「農民の党」であったが、改革開放が始まる頃には、もはやいかなる階級の代表でもなかった。一九八〇年代半ばには、ホワイトカラーがはつきりと党内の中核部分を占めるようになった。包括政党に向かう傾向は、すでにこの時期から始まっていたのである。ビジネスエリートからも力を引き出そうとする江沢民の姿勢は、そのような傾向の必然的な到達点であった。いまや中国共産党はそれが統治する社会の縮図にほかならない。それは、いかなる階級の代表でもないと同時に、すべての階級を代表している。それは高齢の退職者の党であり、ホワイトカラーの党であり、労働者の党であり、農民の党でもある。そうであるがゆえに、この組織は身動きが取れない。つまり「左」にも「右」にも大きく舵を切ることができない。いかなる「偏り」も不能となった政党は、もはやいかなる大胆な理想も掲げることができない——強国の夢以外には。とはいえ、私は統計なるものにまったく疎いものですから、この研究は一切公表しておりません。しかし、服務中心資料は、このような研究を可能にしているのです。

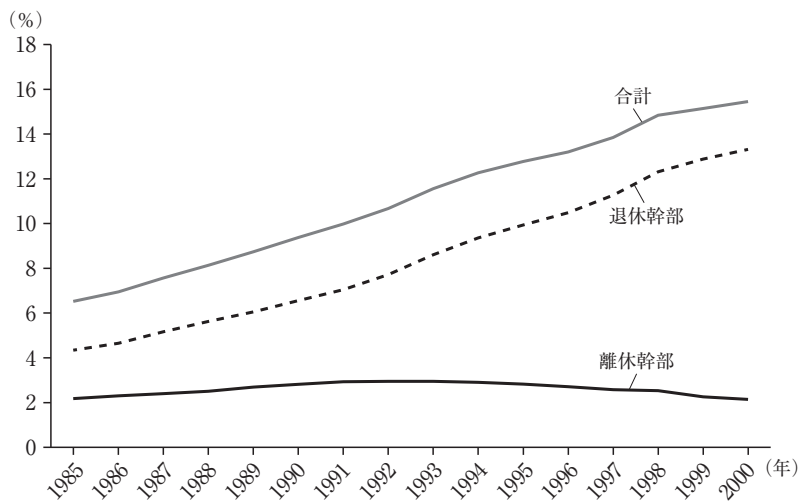
さて、その他にもこの資料集には驚くべき文書がたくさん含まれています。そのひとつは、反革命肅清運動に関する文書です。これは、一九五五年に毛沢東が農業集団化を本格化させる直前に始めたたいへん大がかりな肅清運動で、これまで日本の研究者もアメリカの研究者もよく知らなかった運動です。この運動の全貌が、服務中

図1 党員の学歴別割合 1982-2000年



出所)『中国共産党党内統計資料彙編 1921-2000』2002年、52-53頁の数値に基づき作成。

図2 中国共産党員に占める退職者の割合 1985-2000年



出所)『中国共産党党内統計資料彙編 1921-2000』2002年、101-105頁の数値に基づき作成。

心資料によってようやく明らかになりました。私がいちばん驚いたのは、関連する文書のなかに中国共産党による殺人計画が含まれていたことです。これが一九五五年の全国公安会議で決定された一九五六年の殺人目標数です。人口の一定割合は必ず反革命的であるはずだと想定して、そうした不穏な分子が反革命行為を行う前に、あらかじめ物理的に除去しておこうとしたのです。この運動の概要と、それがもつ意味については『法学研究』に長い論文を書きました⁽⁶⁾。

ところで、服務中心資料をまとめて眺めると、人民共和国期の暴力に関する資料が非常に多く含まれていることがわかります。反革命肅清運動に関する資料はそのひとつですが、それだけではなく、文化大革命が始まる直前の社会主義教育運動(四清運動)——これもかなり凄惨な暴力を伴う運動でした——に関する資料、文革後期の「五・一六兵団」を取り締まる運動、「階級隊列を整頓する」運動、「一打三反」運動、さらには文革が終わってからなおも執拗に続く「闘、批、改」運動など、実に豊富な資料があります。ついでに言えば、反右派闘争に関する資料も、気が遠くなるほどあります。そこで私は二〇二一年に出した『中国共産党の歴史』においては、人民共和国期において暴力とテロルが、いわば政治の通奏低音となっていることを指摘しました。もちろん、こうした現代中国史の「影の部分」は、それ自体としてきわめて重要な研究対象ですが、それと同時に、これほど大きな暗黒面を含んでいたにもかかわらず——あるいは含んでいたがゆえに、というべきでしょうか——中国が改革開放以降に目覚ましい経済成長を成し遂げたのは、いかなる理由によるのかについても考えないわけにはいきません。『中共重要歴史文獻資料彙編』は、先に言及した『革命歴史文件彙集』とまったく同様に、われわれの中国現代史に関するこれまでの理解を大きく揺さぶり、攪乱するポテンシャルを備えています。だから、面白いのです。

4 『構想なき革命』⁽⁷⁾について

最後に、自分が書き上げたばかりの本について——つまり、私の「卒業論文」について——少しだけご紹介しておこうと思います。いまちように印刷に回っています。これは文化大革命の始まりの物語です。

文化大革命は、なぜ、どのように始まったか？ 私が探求を行うにあたっての基本的な想定は、毛沢東が文化大革命を始めるにあたって、構想と呼ぶに値するものを抱いていなかったということです。それが、この本の出発点でもあるし、到達点でもあります。これが議論を呼ぶ想定であることは、私もよく承知しています。というのも、これまで研究者たちのほとんどは、毛沢東が思い描いた構想に沿って準備・計画されたものとして文化大革命の始まりを説明してきたからです。すなわち、一九六二年一月、一九六二年七月、一九六五年一月、あるいは一九六五年春のいずれかの時点で、毛沢東が自分の忠実な部下であった劉少奇の打倒を決意し、そのために綿密な準備を行い、時機を見計らって彼の排除に乗り出すというストーリーが語られてきました。でも私は、このような語り方をまったく支持できないのです。私はこの本の至るところで、毛沢東の言葉遣いがいかにあいまいで、前後矛盾していたか、議論に奇妙な飛躍があったかを執拗に強調しています。そして、これほど自己矛盾に満ち、自らが立てた予定を何のためらいもなく次々に覆していく人物に、周到な計画など立てられるはずはなかったし、現に計画などなかったと主張しています。

つまり、毛沢東が文化大革命に向かう歩みは、「行き当たりばったり」だったということです。計画性のなさ、熟慮の欠如、無定見——これこそが彼の行為を特徴づけていたと主張しています。スタンフォード大学のアンドリュー・ウォルダーがこのような行為の本質を英語でどう表現するのがよいか教えてくれました。improvisation——事前の準備なしに即興で何かを作り上げることです。彼のサジェスションに基づいて、

この本の英語のタイトルは、*An Improvised Revolution* としました。

でも、そうなる厄介な問題が生じます。文化大革命への明確な意志も計画も戦略ももたなかった指導者が、なぜ文革へとたどり着くことになるのでしょうか。説明は一筋縄ではいかなくなります。この問題と格闘したのがこの本です。考察の根底に横たわっていたのは、ひとつの哲学的問題でした。すなわち、毛沢東が文化大革命へと行き着いたのは、偶然だったのか、それとも必然だったのかという問題です。ひとつの岩が、何らかの拍子で斜面を転がり始める。その岩は別の岩にぶつかり、立ち木にぶつかり、雨に濡れた苔に滑りながら、少しずつ方向を変えて落ちてゆく。そして、たまたま落ちた淵に文化大革命という名前がついていた——こういう偶然の連鎖の結果として文革の始まりを描くべきでしょうか？ それとも、毛沢東が作り出しながら、でも彼自身が意識しないうちに出来上がってしまったある種の構造が、彼が意図するとしなやかに関わらず、彼を文化大革命へと連れて行った——こうした必然の物語として文革の始まりを描くべきでしょうか？ 私はきつと参考になるに違いなと思うって、第一次世界大戦がなぜ勃発することになったかに関する本を何冊か読みました。この「起こりそうもなかった戦争」がなぜ起きたか、誰もそれを始める意図も計画ももっていなかったのに、なぜこの戦争が始まってしまったかを論じる本は、きつと参考になるに違いなと思うたのです。

苦しいんだ結果、偶然の物語と必然の物語を組み合わせることとしました。物語のあらすじはこうです。一九五八年に始まる大躍進で、途方もない失敗を犯してすっかり面目を失った毛沢東が、それでも権威を失うまいとして、失敗を封印し、そしてもつと重大な問題に中国は直面していると主張しはじめます。どういう主張かといえば、社会主義中国でブルジョア階級が復活しようとしているという、かなり現実離れた主張です。私はこのような行為を「前方への逃げ」と呼んでいます。でも彼には長期的な展望などまったくありませんでしたし、自分の主張にも自信をもてなかった。しかし、彼の部下たちが、たしかに毛主席のいうとおりだ、「ブルジョア階級

があちこちで権力を奪い始めている」といいはじめ、そうした声が次第に大きくなったので、毛沢東は自信をもつようになります。私は、こうした毛沢東と部下たちとのやりとりを、少し滑稽に描いています。だから、この本は、中国が文化大革命という大きな悲劇にはまり込んでいく物語なのですが、たくさんの小さな喜劇が散りばめられています。

ともあれ、毛沢東が「前方に逃げて」いく過程で、文化大革命を生み出す条件が、意図されずに、ひとつひとつ用意されてゆく。言い換えると、文化大革命を構成する部品が、誰もそうだと気がつかないまま、ひとつひとつ準備されてゆきます。それらの集積がひとつの構造を形作って、毛沢東と彼の仲間たちを文革へと次第に近づけていきます。でも、それらの部品を全体としてまとめあげる設計図はいつまでたっても描かれなかった。文革が始まる一年前の一九六五年になっても、文革の構想など見当たらない。それどころか、一九六三年から始まる社会主義教育運動、別名、四清運動は一九六〇年代末まで続くと毛沢東を含めて指導者誰もがそう考えていた。

だから、一九六六年春の文革の開始に向かって、皆知らず知らずのうちに近づいてゆくのだけれども、最後の瞬間まで、毛沢東を含め誰も自分たちが文化大革命なるものに足を踏み込むことになるとは思っていなかった。ところが、一九六五年秋に思いもかけない、いくつかの出来事が偶然にもほぼ同時に起こり——それは具体的には、皆さんもご存じの歴史劇『海瑞の免官』をめぐる騒ぎ、軍の総参謀長や中央弁公庁主任の解任事件などを指すのですが——その衝撃によって、ようやくそれまでに集められた材料が「結晶化」する、あるいは水が氷となるような「相転移」が生じる、そしてやっと文化大革命が姿を現すのです。このように、最後にやってきた要因に特別な地位を与えることによって、私は超個人的に働く力と偶然の果たす作用を組み合わせて理解しようとした。

こうした方法論、あるいは叙述の仕方の意味するところは、文化大革命は決して毛沢東が、次第に左傾化を強

めたことの必然として生じたのではなく、直前に至るまで、それを避ける道が残されていたということです。もっとも、これは、そうであってほしいという私の願望がすでに起きてしまった過去に投影された結果、採用してしまった方法であったかもしれません。

この物語は、資料的には、『中共重要歴史文献資料彙編』に大きく依存しています。この資料集には、『毛沢東思想万歳』のこれまで知られていなかった版を含めて、毛沢東の講話に関する新しい資料が含まれています。それらを使用しました。それから、四清運動に関する膨大な資料も——とても全部は読めなかったのですが——使いました。だから、これは四清運動に関する研究にもなっています。

この資料は、本当にたくさんの方の研究の可能性に道を開いています。そのため、私はたぶんこの資料をずっと読み続けていくことになると思うのです。皆さんもご存じのクリフォード・ギアーツという文化人類学者が、どこかで書いていたことなのですが、数学者の発想力は一八歳でピークを迎え、二五歳になると枯渇してしまう。しかし、歴史学は五〇歳でも、まだ大きな問題に取り組むには若すぎる。老人ホームでも歴史学はできる、と。⁽⁸⁾私は彼の言葉を信じることにします。また本が書けるかどうかはわかりませんが。

本日はご清聴ありがとうございました。

〔付記〕

本稿は、筆者が慶應義塾大学を定年退職するに際して、二〇二五年三月二日に行った最終講義の内容を、ほぼそのままの形で掲載したものである。このような機会を与えてくださった大学関係者各位に対して、あらためて感謝申し上げる。

(1) この講義後に、父親から事実誤認を指摘された。事実とはいえ、松岡洋右の甥を柔道の技で締め落としたのは、祖父と一緒に酒を飲んでいた、さる有名な柔道家だったとのことである。

(2) この資料集は、中央档案馆と各省の档案馆とが合同で編集したもので、一九八四年から八七年にかけて、それぞれ数百部ずつが内部発行された。現在の政治的条件のもとでは刊行できるようなには思われない、このような資料集が当時刊行されたのは驚くべき出来事であったように思われる。それはおそらく、胡耀邦や趙紫陽という比較のリベラルな指導者たちの名と結びつけられる当時の特別な政治的条件のもとではじめて可能であったのだらう。ただし私は、各革命根拠地のうち中央根拠地に関する資料集だけは入手することができなかった。それを読むことができたのは、ようやく二〇一〇年代に入ってからのことであった。

(3) 当時の黨員たちの名譽のためにつけ加えておけば、資料からは、自らが掲げた革命の大義と矛盾するこのような資金集めの方法に深く苦悩する黨員たちの姿もまた浮かび上がる。これでは自分たちは匪賊と違いがない、という自覚が少なくとも一部の黨員たちにはみられる。そのような黨員たちの内面の葛藤までも浮き彫りにするという点で、この資料集は価値あるものである。

(4) ロベルト・ミヘルス著、広瀬英彦訳『政党政治の社会学』ダイヤモンド社、一九七五年、およびフランツ・ボルケナウ著、鈴木隆・佐野健治訳『世界共産党史』合同出版、一九六八年を参照されたい。

(5) データの出所となった文献は、中共中央組織部信息管理中心編『中国共産党党内統計資料彙編 1921-2000』(表紙に「秘密」とあり) 二〇〇二年二月(『中共重要歴史文献資料彙編』特輯之三十九、ロサンゼルス、中文出版物服務中心、二〇〇五年)。このほか、このプロジェクトにおいては、中共中央組織部編『全国県、処級以上党政領導幹部統計資料彙編 1954-1998』一九九八年八月(『中共重要歴史文献資料彙編』第三十輯第十八、十九分冊合訂本、二〇〇九年)、および中共北京市委組織部・北京市人事局編『北京市幹部、黨員統計五十年 1949-1998』一九九九年九月(『中共重要歴史文献資料彙編』第三十輯第九十七分冊、二〇一二年)も重要な情報源となった。

(6) 「中国における反革命肅清運動と『一九五七年度体制』の起源」(上)(下)、『法学研究』第九〇巻第八号および九号(二〇一七年)。

(7) この著作『構想なき革命——毛沢東と文化大革命の起源』は二〇二五年四月に慶應義塾大学法学研究会より同研究会叢書として刊行された。

(8) この講義の際、私はうる覚えで不正確にギアーツの言葉を引用したのだが、講義後の調査で引用元が判明した。彼は正確にはこう述べている。「数学はもちろん少なくとも一般的なイメージではひとつの極端な例で、一八歳で最盛期を迎え、二五歳で枯渇すると考えられている。歴史学はもう一方の極端な例で、五〇歳では大きな問題に取り組むにはまだ若すぎると考えられることがある。事実上、あらゆる成熟のサイクルが不協和音を奏でているのが即座にみてとれるプリンストンの高等研究所を訪れた人がある昼下がりのお茶の時間に数学者と歴史学者に、この頃研究はどうですかと尋ねたとしよう。「ええ、ごらんのとおり、まだ数学者の幼稚園でね」と近くの髭も生えていない若者に手を振りながら歴史学者は言い、「それに歴史学者の老人ホームでもある」と数学者は言うだろう。」クリフォード・ギアーツ著、梶原景昭ほか訳『ローカル・ノレッジ——解釈人類学論集』岩波書店、一九九九年、二七八頁。